

東京の固有名アクセントの動揺

中川秀太

1. はじめに

最近「新橋」は駅のアナウンスで、①（頭高型）ではなく②（平板型）に発音されていると一人の知人から聞き、山手線に乗って耳を傾けてみると、確かに人によってではあるが、②に発音している（本稿では個々の語のアクセントを表示する際は、番号式に統一する。②以下は、拍数によって中高型ないし尾高型となる）。「東京」や「品川」など周辺の②の駅名に引きずられたのかと推測したが、考えてみると、ほかにも東京の固有名でアクセントの動揺が気になるものがある。「根津」は、①なのか②なのか、あるいは、「人形町」は②か③かなど。朗読のことを考えた場合、このような状態では困る。たとえば芥川龍之介、永井龍男、幸田文など、大正から昭和にかけて活動した東京生まれの作家の作品を朗読する際に都内の固有名が出てくる可能性があるが、現在（2019年）、複数のアクセントがある場合、どれが当時（大正や昭和）のアクセントとして一般的なのか、判断しにくいからである。夏目漱石の「吾輩は猫である」に「東風君」が近松の心中物の朗読を「白（せりふ）は可成（なるべく）其時代の人を写し出すのが主で御嬢さんでも丁稚（でつち）でも、其人物が出てきた様にやるんです」と述べる場面があるが、この考え方をアクセントにも当てはめ、大正・昭和の作品を朗読する際、その時代の東京人らしく発音するという意欲を持つ人もあるだろう⁽¹⁾。

そこで筆者は、自身がアクセントの動揺に気がついた数十の固有名に関し、東京に生まれ育った話者29人にアクセントの聞き取り調査をした⁽²⁾。本稿では、男性にM、女性にFを用い、カッコ内に生年を記す。たとえば「F (1947)」は1947年生まれ的女性。生年のあとに「神田」などの生育地を記すこともある。次に、その結果を辞書に記される伝統アクセント（東京旧市内（旧15区）に生育した人が旧来使ってきたアクセント）と照合し、どのような変化があるのかを分析した。伝統アクセントについては、落語や映画の音声資料（断らないかぎりには東京生まれ）を文字起こししたものを用例に使う（「神田②」のように右上に番号を記す）⁽³⁾。

2. 頭高型と尾高型の衰退

東京の固有名アクセントについて顕著なこととして、4拍、5拍以上の語にお

いて頭高型が衰退し中高型に変化することと、尾高型のアクセントが衰退し平板型や頭高型に変化することとがあげられる。まず「市ヶ谷」「回向院」「落合」「浜町」が前者の具体例であり、秋永（1999）は高齢層に頭高型が保持される実態を記している。本稿の調査では「市ヶ谷」「回向院」「浜町」に関しては、頭高型が皆無となった。内訳は「市ヶ谷」は②29人、「回向院」は②24人、×5人、「浜町」は②24人、×5人である。哥沢芝金（4代目、1892～1981）は1953年3月22日（NHKラジオ）で「震災の時はね、ちょうど浜町^①に」と発音している（2017年1月23日の「NHKラジオアーカイブス」で音声を確認した）。

「浜町」は『明解日本語アクセント辞典』（以下『明解』）の1958年版に新しいアクセントとして②が記されることから、戦後早い時期の変化であることがうかがえる。一方「落合」は『明解（1981）』から②が新しいとの記載が施されることから考えると、中高化の傾向が目立ってきたのは「浜町」などより遅いようである。調査結果は、①27人、②1人、×1人という内訳であり、比較的、頭高の保たれている珍しい例（2拍目が特殊拍でないにもかかわらず）となる。

尾高型の衰退については「寛永寺^⑤」「木場^②」「護国寺^④」「泉岳寺^⑤」「八王子^⑤」「日野^②」など、辞書に尾高型が載る語が具体例となる。辞書は、神保格、常深千里の『国語発音アクセント辞典』（1932、以下『神保』）、『日本国語大辞典初版』（1972～1976、『日国』）、『日本国語大辞典第2版』（2000～2001、『日国2』）、『明解日本語アクセント辞典』の1958年版、1981年版（『明解（1958）』『明解（1981）』）、『新明解日本語アクセント辞典』の2001年版と2014年版（『新明解（2001）』『新明解（2014）』）を用いた（調査目的から外れるため、NHKの辞書は用いない）。

「木場」「護国寺」「八王子」「日野」は尾高→平板が顕著である（「木場」は②27人、①1人、×1人、「護国寺」は全員②、「八王子」は全員②、「日野」は②28人、×1人。内訳は多いものから示す。ただし×は最後に記す）。俳優の伊井友三郎（1899～1977）は映画「日本侠客伝」（1964）で「深川の木場^②は昔からおれのなわばり」と発音する。尾高の地名は川上（2003、p.5）に「浦和」「鎌倉」が例示され「旧東京弁では末核型であったが、今日では無核型が普通」だとある⁽⁴⁾。

尾高→頭高の例としては「寛永寺」「泉岳寺」がある。頭高化により「浅草寺」「祐天寺」など、もともと頭高の寺名と同じになる（「寛永寺」は①24人、②1人、×4人、「泉岳寺」は①25人、×4人）。「寛永寺^②」と答えたのは、1944年に台東区池之端に生まれ、同地で育った話者である。平板型の採用が「無核末核区別意識の衰退」（川上（2003、p.9））によるものだったとしても、頭高型のアクセントに比べれば、伝統アクセントとのつながりが感じられる。「泉岳寺」は小坂機融住職によると「「泉岳寺」（頭高型）ではなく「泉岳寺」（平たん）が古くから言われている」アクセントだという⁽⁵⁾。さらに2018年12月14日、泉岳寺の赤穂義士記念館の展示品の説明を受けた際、「（書状を）泉岳寺^⑤に持ってきた」と、

地元の檀家とおぼしき系の男性が言うのを確認した（インタビューの結果ではなく、自然発話として）。このとき、尾高アクセントが生きていることを確信した。

3. 無声化と固有名アクセント

以下の固有名は、母音の無声化によりアクセントの位置にずれが生じる。

立川：②17人、③12人

白山：③11人、②10人、①5人、①1人、×2人

府中：①22人、②6人、×1人

無声化するの「立川」のチ、「白山」のク、「府中」のフであり、伝統的には「立川^③」「白山^③」「府中^②」のようにアクセント核が1拍分、後ろにずれる。現在は普通名詞の「奇跡^②」「秋風^③」などを「奇跡^①」「秋風^②」と発音する話者が増えているのと並行的に、「府中」「立川」を「府中^①」「立川^②」とする話者が多い⁽⁶⁾。

一方「白山」については、「白山^③→白山^②」という動きのみであれば、上記の地名と同様に扱うことができるが、実態として「白山^①」も聞かれる点は、「新橋」など2拍目に特殊拍が来るもの以外で頭高が衰退傾向にあることを踏まえると異質である。辞書では、『神保』『日国』『日国2』に③が記され、『明解』『新明解』には文京区という記述がなく「加賀の～」という用例が示されている。『日国』『日国2』のアクセントの担当者は、秋永一枝氏（1928～2017、両国）、川上蓁氏（1926～2011、青山）、清水郁子氏（未確認）であり、この辞書で文京区の「白山」も山の「白山」も③となっていることから考えて、『明解』『新明解』に文京区の「白山」を載せたとしても、やはり③になったであろうと推察される。

- (1) あたくし生まれは小石川の白山^③でした。（加藤治子（1922～2015、赤坂）。1990年のNHKドラマ「振り向けば春」）⁽⁷⁾

「高尾山」「白根山」「阿蘇山」など「～山（サン）」の語は、「山」の直前にアクセント核があるのが一般的であり「白山」も②となりそうだが、前述のように無声化により3拍目にアクセントがずれる。「白山」について注意が要るのは、京阪アクセントでは山の「白山」はハが高い点である（『日国』『日国2』）。そこで「京阪地域の人が文京区の白山という地名を発音する場合、地元での発音をあらかじめ知らなければ、山の場合と同様に発音する」という仮定のもと、大阪の生え抜き4人に山および文京区の白山を発音する場合（旅行で訪れた際など）を尋ねてみると、いずれから①に発音するとの回答が得られた。以上から、文京区の白山が①に発音される要因としては、①京阪地域の人が東京に移り住み、京阪における山のアクセントを文京区にも当てはめる、②山登りをする東京ないし関東の人が①のアクセントを西方から持ち込み、文京区にも当てはめるといった経路が考えられる。それから、関西にも山の白山にも行ったことのない話者が「白山^①」を身につける可能性も考えてみる必要がある。そのような東京生まれ

の話者が文京区の白山あたりに足を運び、そこでの発音に注意すれば③を身につけるが（または②と聞きとり②で覚える）、白山に縁がなく「ハクサン」（語形）と「白山」（表記）から判断するとなれば、可能性として、まず「～山」の諸語のアクセントを参考に②を選ぶ場合が考えられる。これは「～山」の規則的なアクセントであり、そう耳立つことはない（③を常用し、②に違和感を持つ話者もいるが）。

「白山^①」を選ぶ理由としては「富士山」と同じということをあげる話者のほかに、テレビ出演者や先のA・Bタイプの話者による①の発音を聞き、それを文京区にも当てはめるといふ話者がいる。そして、後述するように4拍語の東京の固有名に関しては、①のものが多いため、多数派への類推により「白山」にも①のアクセントが生じる。ただし、ほかと異なるのは、①を選びたくなる上記のような要因が存在するため、①の選ばれる優先順序がそれより劣る点である。いずれにしても、F（1939、文京区西片）など何代にもわたって白山の近くに住み続ける家の人間にとって、①や①は思いも寄らない発音である⁽⁸⁾。

4. 平板式→起伏式

4.1 2拍から4拍程度の語の場合

ここでは伝統的には平板式の地名が、新たに起伏式に発音される傾向を検討する。たとえば「葛飾」は『明解（1958）』に②と①が記載され、①は「古」との注記がある。本稿の調査では①の話者はいない（俳優の森雅之（1911～1973）は映画「浮雲」（1955）で平たんに発音する）。「目白」にも同様の傾向がある。『神保』『日国』『日国2』『明解（1958）』は①のみ、『明解（1981）』『新明解（2001）』『新明解（2014）』は①①である。また、佐久間（1929）でも①とされている（「目黒^①」とも）。一方、調査結果は、①26人、①①1人、①①1人、×1人。目白に長く住んだドイツ文学者の高橋義孝（1913～1995、神田）は、1967年の『放送文化』22-3で、第二次世界大戦のころから次第に①に発音されるようになってきたと述べる。高橋同様、三升家小勝（5代目、1858～1939）も「目白^①から先」（『昭和戦前面白落語全集東京編』）、三遊亭金馬（8代目、1894～1964）も「池袋^③、降り損なって目白^①まで」（『三遊亭金馬全集8』）と①に発音する。「目白^①」と言う人の感覚では、鳥のメジロと地名の目白が同じアクセントでも、どちらを指すのかは文脈から理解されるがゆえに不都合はない。一方「目黒^①」と発音する人の感覚としては、①では鳥のメジロになるから言い分けたいとなる（「目黒」と同じアクセントであるはずだとの類推が働いた可能性もある）。

辞書で平板のみの以下の語は、インフォーマントの多くが起伏式である。

阿佐ヶ谷：『明解（1958）』から①のみ。②27人、①1人、×1人

堀切：『新明解（2014）』から①のみ。②18人、①6人、×5人⁽⁹⁾

森下：『新明解（2014）』から①のみ。②24人、×5人⁽¹⁰⁾

4.2 語構成を意識しやすい場合

主に5拍以上の長い語においては、平板式の語が規則的なアクセントに変化することがある。たとえば「～町（まち）」は、「大手町」あるいは普通名詞の「城下町」のように、「町」の直前にアクセント核のある語が多い。それゆえ「信濃町^①」から「信濃町^③」へという変化が生じる。インフォーマントの回答は、③21人、①5人、③①1人、①③1人、×1人、という内訳である。地元の信濃町で飲食店を営む高齢の女性の声を聞いて、M（1956）は①のアクセントを覚えたというが（だいぶ前の話として）、そのような機会もすでに得がなくなっている。また「麹町」にも動揺が見られ、①24人に対し、1980年以降に生まれた5人は③で回答している。もっとも、1990年生まれと1999年生まれの2人は①であり、今後③で固定するとも簡単には言えない。動向を注視し続ける必要がある⁽¹¹⁾。

4拍の「幡ヶ谷」は『新明解（2014）』に①とあるが、調査結果は、②26人、①0人、×3人。「市ヶ谷」「熊谷」同様、ガの直前にアクセント核が来やすい。

「～橋」は『日本語百科大事典』（1988、pp.261-263）に次の指摘がある。

- （2）「一石（いちこく）橋・桜橋・業平橋・永代橋」などの橋名は、「橋」の前に下がり目があるアクセント型だが、「合羽橋・神田橋・水道橋・日本（にほん）橋・聖（ひじり）橋・柳橋・両国橋」などの橋の名は平板型である。後者を耳で覚えた東京人でなければ、前者の一般法則によって起伏式に発音するであろう。

本稿では、平板型が伝統的だとされる以下の「～橋」について調査した。

清洲橋：③20人、①4人、①③1人、×4人／水道橋：①21人、③8人

代田橋：③12人、①9人、③①1人、×7人／聖橋：①14人、③11人、×4人

柳橋：①22人、③①1人、×6人／両国橋：④21人、①5人、×3人

「清洲橋」「両国橋」に関しては、「吾妻橋^③」「駒形橋^④」「白鬚橋^④」など隅田川にかかるほかの橋の影響もあり、起伏式への変化が顕著である。M（1942、神田）やF（1947、深川）など、川に近い土地に生まれ育った話者は「清洲橋」「両国橋」ともに①を保持する。神田川の川口にあり、両国橋にほど近い「柳橋」は、比較的①がよく保たれる。「水道橋」は、①に加えて③のアクセントが目立つ。水道橋近くの高校生の会話からしばしば③が聞かれることなどから推して、かなりよく行われるアクセントのようである。もっとも、必ずしも中高型が新しいアクセントだとも言えない可能性がある。こう考える理由の一つは、インフォーマントのうち、F（1939）、M（1942）、F（1944）などの世代でも、迷わず③と答える点であり、もう一つは佐久間（1929、p.628）に「水道橋^③」について「複合語の成立から考へてかういふ起伏式の型をとるのが本来であらうが、やうやく」

平板型に「発音されることが多くなつてゐる」とあるからである。つまり、かつて「水道橋」は中高型と平板型とで動揺していたが、徐々に平板型が優勢になった。それゆえ平板型が標準アクセントとして辞書に記され、現実にも、その状態が続いてきたものの、規則的な中高型に発音しようとする傾向はいつの時代にもくすぶっていて、現在は中高型が力を盛り返してきた、との見方もできる。

次に、「～町（ちょう）」の語のうち「人形町」に注目する。「～町」の語は「小伝馬町」「岩本町」「永福町」など「町」の直前にアクセント核があるもののほか、「永田町」のように平板式のものもある。「人形町」は、『日国』『日国2』『新明解（2014）』に①が記載されるが、インフォーマントの回答では、1939年生まれから1947年生まれまでの11人は、いずれも①で答えてい、1953年生まれの男性に③が出てくる。それより下の世代になると、①と③とが入り交じるようになり、自分では①だが、駅で③を発音しているから、こちらが正しいのかと疑問をいただく話者も幾人かいる。金原亨馬の助（初代、1928～1976）の「法界坊」（『古典落語の巨匠たち第二期』に収録される）から用例をあげる。

（3）人形町①なんてえと、なんかこの人形の御店（おたな）があつてそういう細工をする人が住んでいるんで人形町

「九段下」は『新明解（2014）』に①が記載されるが、②のアクセントが目立つ（②19人、①9人、②①1人）。「九段^①」の下と意識されると、「九段下」に起伏式が保存されやすい。ただし、長年、九段下にほど近い場所で古本屋を営むM（1943）、F（1947）は、周りで②を聞いたことはないという。

最後に、土地の人は使わないものの駅のアナウンスに目立つアクセントとして、「御茶の水」の③をとりあげる。いずれの辞書も①で、調査結果も29人全員が①であった。それゆえ「御茶の水③」は、土地との関係がない人のアクセントである疑いが濃い。「御茶+の+水」という語構成を意識して③になったようだが、これは「仕事柄、知らない地名であっても発音しなければいけない」という事情がもとになって生じた可能性がある。鉄道会社に勤める知人によれば、会社で駅名アクセントの教育はなく、適切なアクセントというものを意識する機会が少ない。ここでは「御茶の水③」や本稿の冒頭にあげた「新橋^①」のように、交通機関に顕著であり、かつ、土地の人が発音しないアクセントを仮に「交通機関アクセント」と呼んでおく⁽¹²⁾。

5. 起伏式→平板式

起伏式の語が平板式に変化した例として有名なのは「原宿」である。秋永（1999）に②→①の変化が詳述される。本稿の調査では、①22人、②5人、①②1人、×1人という内訳である。F（1955）は、本人は①だが、上の世代が②を使うから①②だと答えている。もっと下の世代では、最初から②は知らないという反応に

なる。「高田馬場」は、アクセントとともに清濁の問題がかかわる。もともとは「たかたのばば」だったが、駅名を「たかだのばば」と決めてしまったため、濁音で一般化したとされる。インフォーマントには、清音の記憶がある話者も、F (1939) など数人いる。濁音で発音する場合ということでアクセントを確認すると、⑤24人、⑩3人、⑩⑤1人、⑤⑩1人という内訳である。M (1943)、F (1955)、F (1961)、F (1995) など、世代をまたいで⑩の使用が見られる。辞書には⑩の記載はないものの、一定の支持がある「周辺アクセント」としてとらえておく。

以下には、「神田」「原宿」ほど全国的に有名だとも言えない地名、いわば「小地名」を三つとりあげる。本門寺のある「池上^②」、根津神社のある「根津^①」、都電の三ノ輪駅がある「三ノ輪^②」で、調査結果は次のとおりである。

池上：②18人、⑩3人、×8人

根津：⑩17人、①11人、×1人

三ノ輪：⑩13人、②11人、①1人、⑩①1人、×3人

三つの地名に共通するのは、当地の人の発音としては、「池上^②」「根津^①」「三ノ輪^②」で安定しているのにもかかわらず、その土地になじみのない東京生まれの人には、平板型が出てくる点である⁽¹³⁾。その際、上記の「池上本門寺」「根津神社」「三ノ輪駅」などの複合語のアクセントからいわば「逆算する」、つまり複合語の前部分としては平たんに発音されるため、単独の場合にも平たんなアクセントを適用しようとする話者が意外なほどに多い。アクセントに関して、誤りという用語は一般に避けられるようだが、複合語のアクセントから単独のアクセントを導くのは誤りという程度のことは明記してもよいのではあるまいか。

(4) 根津^①の七軒町に鍛山喜平次（三遊亭円生（6代目、1900～1979）大阪。「六代目三遊亭円生集9」）⁽¹⁴⁾

これらの地名に⑩を用いる理由には、名字からの類推もある。「池上（さん）」「根津（さん）」「三ノ輪（さん）」などの場合に平板に発音するのを小地名に当てはめると、地名も平板という考え方である。さらに筆者は、3、4拍語で平板型が多数派だという事実が⑩出現の要因になっていると見る。『新明解（2014）』から「地」の記号が付された東京の地名を抜き出すと、次のような内訳になる。

3拍語：①16か所、②3か所、③0か所、⑩37か所、⑩①1か所

4拍語：①7か所、①②1か所、②9か所、②①1か所、②⑩1か所、③2か所、④0か所、④①1か所、④①①1か所、④②1か所

3拍語では平板型が最も多く、頭高型がそれに次ぐ。4拍語は平板型、②の中高型の順である。4拍語の頭高型は「十条」「本郷」など、2拍目に特殊拍のある語がほとんどである。以上をもとに、東京人がいかにして知らない土地のアクセントを自らの中で確定していくのか（耳で覚える以外の方法として）を整理すると、次のようなパターンが考えられる。

甲：平板式だと見当をつける→伝統アクセントも平板式

乙：平板式だと見当をつける→伝統アクセントは起伏式

丙：起伏式だと見当をつける→伝統アクセントも起伏式

丁：起伏式だと見当をつける→伝統アクセントは平板式

たとえば「柴又」「小平」を知らずとも、直感的に①と②が選択されれば、伝統的なアクセントと一致し、問題にはならない⁽¹⁵⁾。一方、乙や丁の場合、そのような判断が多くの人に行われると、伝統アクセントよりも優勢になり、主従の交替が起こる可能性が出る。この乙に相当するのが「池上」「三ノ輪」である。「池上」は4拍語の多数派である平板型に発音すると、伝統アクセントからずれる。「三ノ輪」は、中高型が少数派のため、平板型か頭高型のほうが思いつきやすく、実態としては平板型が多く話者に選択される。たとえばM(1954、台東区鳥越)は、「三ノ輪^②」と答えたが、本稿の筆者が「②は聞きませんか」「三ノ輪という土地とのご関係は」などと問うと「よく知らない。行かないから」と返答した。このように「なじみはない。ただし東京の地名には平板型が多いから、きっとX(任意の固有名)のアクセントも同様だろう」と判断する話者は多い。知名度の高い土地なら、テレビやラジオを通して、起伏式のアクセントを意識するようになるが、ここで言う小地名の場合には、そのような機会もなく、類推による平板型が個人のアクセントとして定着する。同様の類推が、当該の土地から離れた場所で多くの話者によって行われ、一定の勢力を得るようになったものと見られる⁽¹⁶⁾。

丁の例は、4の「平板式→起伏式」で扱った「堀切」「森下」や『新明解(2014)』に平板型とある「墨田」「豊島」などである。「墨田」「豊島」は、ふだん単独では言わないため、いざアクセントを問われると頭高になりそうだとの声が聞かれる。

以上に対し2拍語の「根津」の場合は、やや事情が異なる。『新明解』の「アクセント習得法則20-21」に2拍の地名は「ほとんど頭高型」とあり、「根津^①」が自然に習得されそうであるのにもかかわらず、①を選ぶ話者が多いからである。ただし『新明解』の指摘は、東京に限らず2拍の地名全般についての指摘であるため、ここでは東京の場合に限って検討しなければならない。すると、筆者の見落としがなければ、2拍語については、頭高型が3(芝、多摩、根津)、尾高型が1(木場)、平板型が2(日野、三田)という内訳である。このうち、尾高の「木場」は前述のように平板型が一般化しているので(『新明解』に「日野^②」はなし)、単純に考えれば、頭高型と平板型は3対3の同数になる。言いかえるなら、2拍語においても頭高型に平板型を抑える力がないということである。

耳で聞いたことのない固有名を発音するとき、平板型が生じやすい傾向を見てきたが、本節の最後に東京人がいづく次の疑問を検討する必要がある。たとえば「府中本町」は知っているが「府中」は知らない、しかし「府中」のアクセントを問われれば起伏式を選ぶけれども、なぜ「府中本町」のアクセントから平板型

を類推で選ばないのだろうかという疑問である。これについて本稿の筆者は、㊦2拍から4拍までの地名について、平板式か起伏式かを選ぶ（その際、現代では、尾高型や3拍語の中高型は、きわめて候補にあがりにくい）、㊧直感ないし何らかの理由で㊦の選択が済めば、複合名詞のアクセントは考慮されない、㊨平板式と起伏式とで迷ったとき、平板式を選ぶ補助的な根拠として複合名詞のアクセントが利用される、という流れを考える。「府中」の場合、㊦の段階で起伏式が選ばれれば、「府中本町」のアクセントに頼る必要はない。一方「根津」について、話者によっては「根津神社」のアクセントをもとに「根津[㊦]」を導き出すが、これは㊨の段階までアクセントの決定が行われない場合だととらえればよい⁽¹⁷⁾。

このような類推によるアクセントの付与は、東京と称する土地が戦前よりも広がり、そこに住む人々も種々雑多になった結果として、ある意味、しかたないともいえる。おかしいアクセントだと地元の人が腹を立てずに済むように、または、その土地になじみのない話者がアクセントに迷わずに済むよう、駅名標などにアクセントを記すといったことを真剣に考えるべき時期に来ているのかもしれない。

なお「起伏式→平板式」「平板式→起伏式」のうち、いずれに対して、より違和感が強いのかを考えてみると、たとえば「巢鴨[㊦]」「市ヶ谷[㊦]」を㊦にする場合より、「神田[㊦]」「品川[㊦]」を㊦や㊨に発音する場合のほうが抵抗感強い（複数のインフォーマントに確認済み）。平板化させた場合は、楽な発音に流れたかという程度にしか感じないのに対して（それでも違和感はあるが）、起伏化させた場合は、平板でなじんでいる固有名を、わざわざインパクトのある起伏式アクセントにする必要性がどこにあるのかといった強い疑問が生じるためである。「森下」「堀切」などは、「目白」についての高橋義孝のように違和感を公に訴える人もないまま、いつの間にか起伏化が進んでしまっているケースだと見られる。

6. 「利根川」を例に地元アクセントについて考える

利根川は群馬県の藤原を源流とし、千葉県銚子で太平洋に流れ出る。アクセントは㊦が一般的である。ただし群馬県の前橋市などでは㊨に発音しているので、萩原朔太郎の「利根川のほとり」を読む際は㊨がふさわしいかなどという想像もしたくなる。限られた調査ではあるが、筆者の観察したところを述べると、以下のようなになる。まず東京のほか利根川の下流に位置する千葉県銚子市、香取市、我孫子市では㊦を耳にし、埼玉県でも、さいたま市など南の地域では㊦が発せられる。ところが北部の熊谷市では、生え抜き12人のうち、6人が[㊦]、6人が[㊨]で、中には㊦と㊨とで迷う話者もいた（2018年3月17日）。深谷市の3人、本庄市の1人も㊨であった。進んで群馬県の高崎市では㊦が2人、㊨が6人、前橋市では㊨が10人（2018年4月6日）。二つの市で差が出るのは、利根川を地元の川と考えているかどうか要因が求められる。つまり前橋の人にとって利根川は、市内

を流れる地元の川なのに対し、高崎の人にとって地元の川は「烏川」である。高崎市で⑩と答えた話者に利根川になじみがあるかどうかを尋ねると「ない、烏川^③ですね、こちらでは」という回答となり、東京などで使われる⑩でよいという姿勢である。さらに北上し、流域の沼田市、みなかみ町の湯檜曾（土地の人はヌマタ^③、ユビソ^①と言う）では、それぞれ2人、合計4人から②との回答を得た。源流の藤原地区では、奥利根民俗資料館館長の吉野仍次氏をはじめ5人の生え拔きが②と回答した（前橋、沼田、湯檜曾、藤原で⑩の話者には出会わなかった）⁽¹⁸⁾。

まとめると「利根川」のアクセントは、㉗㉘で発音する上流の地域、㉙㉚も②も出る中間的な地域、㉛㉜で発音する下流の地域、となる。では、たとえばアクセントに対する学習意欲の高い外国人学習者などに標準アクセントとして、どちらのアクセントを提示すべきか。㉗の地域も㉛の地域も地元意識はあるだろうから、それだけでは標準アクセントは決められない。したがって㉗の地域の人にも納得してもらうには、東京アクセントを基礎にして確立した標準アクセントにおいては「利根川^⑩」であるとし⁽¹⁹⁾、学習者には⑩を教えるものの、それは土地ごとに使われるアクセントを否定するものではなく、地域アクセントとして②を尊重するとの姿勢を示す必要がある。従来この点が不十分で、地名アクセントについて「東京ではこう言う」と東京側で記し、各地では、それを押しつけと解釈してきたがために、東京対各地元という構図になってしまっていた⁽²⁰⁾。

7. 東京のアクセントがなぜ変化するか

東京が標準語の使われる代表的な土地であるのなら、なぜアクセントが激しく変化するのかという疑問が生じる。以下、先学の指摘を頼りにしながら、アクセントの変化にかかわったであろう要因を時間的な流れに沿って記述していく。まず、江戸から東京へという移り変わりを考えるうえで、次の指摘に注目する。

- (5) 江戸語から東京語へするすとなめらかに流れこんだ、その江戸語の特徴についてである。それは、アクセントであった。

（亀井ほか（2007、p.72））

東京・山の手のことばが標準語のもとになったという通説に対しては、森岡（1972）や野村（2013）から異論が出ているが、それらで否定されるのは、文法や語彙の分野で山の手地域がもとになったということであって、アクセントは議論から除外される。管見の限り、アクセントについて（5）のような考えを否定する指摘はない。ただし山の手地域に関しては、杉本（1988）、野村（2013）などが指摘するように、明治維新により、そこに住んでいた旧幕臣が去り、代わって薩長土肥などの官員が数多く移り住んだため、人口構成に大幅な変動があった。日比谷（1988、p.167）は、金田一春彦氏が1941年に行った鼻濁音の調査において、山の手地域に〔ŋ〕→〔g〕の動きが見られたことに関し「旧薩摩・長州はいず

れも非鼻音地域であり、語中の〔g〕音のルーツは、むしろここにあると考えられる」と推測するが、これを否定する特段の理由はないと思われる。そしてアクセントにも同様のこと、つまり親のアクセントが子どもに影響し、東京のアクセントと異なるアクセントが東京という場所で恒常的に使われた可能性は大いにありうる⁽²¹⁾。たとえば薩長の出身ではないが、作家の杉森久英（1912～1997）が自分たち夫婦のことばが東京生まれの娘に影響したと述べる次の話は参考になる（杉森（1990、p.131））。

- （6）小学生のころ、雨のことを「あめ」と、「め」にアクセントを置いて発音したら、先生に「あめ」と言いなさいといわれたそうである。私も家内も石川県だから、ふだん「あめ」といっている……

親のことばを子どもが受け継ぐのはよいことのはずだが、東京に移り住んだ人の子どもがそれをする、特にアクセントの場合は変に感じられてしまう⁽²²⁾。

以上を考慮すると、人口構成が大きく変わった山の手地域よりも、相対的に変動の小さかった下町地域にこそ、東京アクセントの話し手がたくさん残っていたはずである。しかし、1923年9月1日の関東大震災、1945年の3月10日の東京大空襲により、大勢の下町の人が命を失い、また「人災はなくとも家を失い職を失い、その土地に住めなくなった住民の数は限りない。この二つの破壊で東京弁話者の多くは生育地から消えていった」（秋永（2011、p.138））という事態が生じた⁽²³⁾。戦後の東京の人口構成を記したものとしては百目鬼（1971）がある。百目鬼は東京都が発行した「都民の生活'63」（20歳以上の都民が対象のサンプル調査の結果を掲載する）にもとづき、次のように述べる（百目鬼（1971、p.6））。

- （7） 地方出身者は五五％で、東京出身者は四五％となっている。そして、東京出身者といっても、親が地方出身の場合は、言語その他文化的に親の影響をかなりつよくうけるため、準地方出身者とみなすものとするれば、これが二六％もいるから、広義の地方出身者は八一％……

残り19％が「三代以上東京に定着している、いわゆるちゃきちゃきの江戸っ子」とされるが、1980年代に起こった地上げがその江戸っ子をさらに減らす。たとえば「横丁いずこもガキだらけといわれた根津一丁目だけで、〇～九歳の子供は一九七五年の三百十人から一九八五年に百七十五人と、十年間に百三十五人も」（森（2010、p.207））減るなど、東京のことばを受け継ぐ人間が姿を消していく。以上のようなできごとにより旧東京人（江戸っ子）が減った結果、新たに東京に移り住んだ人々は、旧東京人を見本にアクセントを学ぶということが、たとえそうしたくとも難しくなる。ゆえに、あるときはテレビのアクセントを見本に、あるときは類推によりアクセントを判断するようになる。名詞には事実として平板型の語が多いため、それを無意識にでも感じ取り、知らない語はひとまず平板型に発音するとの方策もとられる⁽²⁴⁾。このようなことが重なり合い、特に戦後、ア

クセント変化が顕著になったものと考えられる。

8. おわりに

先に記したように東京のアクセントが揺れ動くことで困るのは、学習熱心な外国人学習者や非東京アクセント地域の話者である。現行の辞書のうち『日国』（第2版を含む総称）のみが「現代の標準的なアクセントを注記する」と、標準アクセントを載せると明示するが、筆者としては、『日国』をもとにアクセント辞典を作り、それを標準アクセント辞典として国が保証を与えればいいと考える。固有名に関しては『日国』のカバーする範囲は広く、そのアクセントを標準アクセントとすればよいと見る（戦前の東京のアクセントを保持する編者およびその世代の東京人が使う、類推などの影響を受けていないアクセントに価値を置く）⁽²⁵⁾。もし細部に調整が必要なら、標準アクセント委員会のようなものを設け、しかるべき研究者がその任にあたればいいだろう。その際は、多数の話者がそう言っている、楽な発音だといったことだけを判断材料とするのではなく、「口頭言語の聞きとりやすさ」（イエスベルセン（1981）の三宅鴻氏による「解説」）という点も十分に考慮されたい⁽²⁶⁾。もし「学習しやすい簡単なアクセント体系」を人工的に設けることになった場合にも、聞き取りやすさの条件は外せない。

動揺する東京のアクセントが落ち着くまで待つのでは、前述の学習者などは困る。比喩的に言えば、旧東京人と新東京人（明治以降の各県からの転入者と、その子孫）、あるいは東京人と関東人（東京以外の神奈川、埼玉などの人）との標準アクセント（標準と意識するアクセント）を巡る覇権争いなど、学習者にとっては迷惑な限りである。彼らが心ない一部の人からなままっていると言われずに済むよう、標準を示す辞書を提供すべきではないのか。首都圏の間は、寿岳（1985、pp.84-85）の次の指摘をかみしめる必要がある。

- （8）標準語的なものは、それでそれはきちんとしてもらいたいものですが、NHKといえども、標準語のきっちりした世界は、随分めちやくちゃになってきていると思います。私どもとは全然違うアクセントだけれど、それはおかしいんじゃないかなと思うことがいくつもございまして、その意味では、戦国乱世時代みたいな方言現象になってきている……

筆者としては、標準アクセントの検定試験を設け、それに受かった日本語教師や朗読をする人などに標準アクセントの担い手となってもらえば、アクセントに関心のある人々にとっての見本になると見る⁽²⁷⁾。学校教育にアクセントを導入すれば、全国的に標準アクセントが身につくと考える立場もあるが、地域の個性がなくなっていくのかという声や、教師の負担が大きいといった指摘が予想され、その実行には課題が多い。それゆえ、先ほどあげたような、一部の志ある人に大役を務めてもらうというのが、比較的に難が小さい行き方ではないかと思う。

一方、首都圏の話者のふだんのアクセントについては特段の規制は設けず「実態アクセント」として記述すればいい⁽²⁸⁾。その際、実態アクセントは上記の「標準アクセント+新興のアクセント」から成ると考える。ゆえに新東京人や関東人には、自らのアクセントが教育により制限されずに済むのと引きかえに、④外国人などにアクセントを教える際は、自らのアクセントには新興アクセントもあると意識し、標準アクセント辞典を参照する、⑤標準アクセント辞典に沿う発音をし、新興アクセントを用いない話者（高齢の話者、外国人、非東京アクセント地域の話者）にアクセントが変だとか古いとかいう発言をしないという自己規制が要る⁽²⁹⁾。実態アクセントの行き着く先が無制限の平板化であるにせよ⁽³⁰⁾、英語のような強弱アクセント化であるにせよ（川上（1971）、金田一（1981））、それはまだ先の話である。現段階では、伝統的・標準的なアクセントをちゃんと発音しようとする話者が踏みつけにされることのない社会であることを夢想する⁽³¹⁾。

参考文献

- 秋永一枝（1995）『東京弁は生きていた』ひつじ書房
秋永一枝（1999）『東京弁アクセントの変容』笠間書院
秋永一枝（2002）「東京語の発音とゆれ」『現代日本語講座3』明治書院
秋永一枝（2011）「減びゆく言語「東京弁」」『日本の危機言語』北海道大学出版会
イエス・ペルセン（1981）『言語』岩波書店
上野善道（2003）「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座3』朝倉書店
亀井孝・大藤時彦・山田俊雄（2007）『日本語の歴史6』平凡社（単行本は1965年に平凡社から刊行された）
川上泰（1971）「国語アクセントの将来」『金田一博士米寿記念論集』三省堂
川上泰（2003）「東京アクセント末核型の行方」『国語研究』66
金田一春彦（1981）『日本語の特質』NHK出版
佐久間鼎（1929）『日本音声学』京文社
寿岳章子（1985）「関西ことばの基層」『上方ことばの世界』武蔵野書院
杉本つとむ（2014）『東京語の歴史』講談社（単行本は1988年に中央公論社から刊行された）
杉森久英（1990）『わが後に洪水あれ』潮出版社
野村剛史（2013）『日本語スタンダードの歴史』岩波書店
日比谷潤子（1988）「バリエーション理論」『言語研究』93
百目鬼恭三郎（1971）『地方文化の意味と役割』朝日新聞社調査研究室
森まゆみ（2010）『抱きしめる、東京』ポプラ社
森岡健二（1972）「現代の言語生活」『講座国語史6』大修館書店

注

- (1) 引用には『漱石全集1』（1993、岩波書店）を使用した。
- (2) インフォーマントの中には、江戸時代から続く家の人もいれば、本人の代から東京生まれという人も含まれる。伝統的なアクセントの保持という面だけでなく、新しいアクセントの出現状況も確認したいと考えたためである。生年は、1939年から1999年生まれまで、男（8人）、女（20人）という内訳である。
- (3) その固有名をインフォーマントが（よく）知らない場合は×とする。類推などにより回答したアクセントに意義は見出しがたいからである。しかし実際には、一部の辞書に「忠孝」「洗い張り」に④が記載されること、④を使う話者がこれらの語になじみがない場合が多いことなどをもとにして秋永（2002、p.52）が「私は、日常その言葉に馴染みのない人の類推アクセントよりも、生きて使われているアクセントこそがその言葉本来の姿だと考えているので、「忠孝」や「とうなす」「洗い張り」の④型は本来の型として認めない立場をとる」と強調せざるを得なかったように、その語を使用語彙の中に持たない話者のアクセントが容認される現実が存在する。なお一部の東京人には、自らのことばは標準的だとの意識が過剰なことがあり、知らない語も類推で答えようとする傾向があるので、×にはそれを防ぐ役割もある。
- (4) 川上（2003）の「末核型」「無核型」は、本稿の「尾高型」「平板型」に当たる。
- (5) 泉岳寺の山本忠道氏が、ご住職に尋ねてくださった。助詞をつけた場合に音が下がるのかどうかは判断しにくいとのことだが、ここでは頭高でないことが確認できた点が重要である。なお本稿では、語が単独で発音されるなどし、尾高型と平板型との区別がつかない場合に「平たん」という言い方をする。
- (6) 母音に無声化がある語の場合、調査者とインフォーマントとの間で判断が異なることがある。詳細は秋永（1999）に所収の「アクセント核の移りと聞こえの方言差」を参照。
- (7) 自らの発音が②だと意識する話者は、この用例を②と判断する傾向がある。これは、聞いたことがないから「白山^③」が身につかないという場合に加え、たとえ「白山^③」を耳にしても頭の中では②として受け取る場合があることを意味する。
- (8) 上野（2003、p.83）に「従来は自分の生活圏の中で使われているアクセントを実際に耳にしながら習得」したが「現代の生活は膨大な情報量に晒され、聞いたこともない単語も規則・類推によって発音する度合いが急速に増えている」との指摘がある。
- (9) F（1963、荒川区）は高校生のとき、堀切から通ってくる友人の発音を通して④を覚えたという。映画「男はつらいよ 柴又より愛をこめて」（1985）には、女優の栗原小巻（1945～）が「堀切」を平たんに発音する場面がある。
- (10) 『新明解』の「アクセント習得法則21」に4拍語には②が多いが平板型も、との記載があり、「森下」や「堀切」は多数型への変化と見られる。また少数派の③の語が②に発音される傾向も一部にある。「小金井^②」「玉の井^②」が具体例である。インフォーマントの回答は、「小金井」は③26人、②1人、×2人、「玉の井」は③24人、×5人であり、

東京生まれという条件のもとでは、②は今のところ出にくいと見ておく。なお「小金井」を②に発音する話者は「東小金井」「武蔵小金井」を⑤に発音する。

(11) 三笑亭可楽（8代目、1898～1964）の「親子酒」（『NHK落語名人選37』）に「麴町」が平たんに発音されている箇所がある。

(12) そのアクセントの発生源が交通機関ではなかったとしても、それが非常に目立つ場が交通機関であるのなら、このように呼ぶことにしておく。

(13) 三ノ輪でリフォーム会社を営む八木佳津美氏（1957、三ノ輪）によれば、周りで⑥は聞かないとのこと（父親も三ノ輪生まれ）。筆者がほかの三ノ輪の住民と話してみても一貫して②であった（新住民を除く）。

(14) 「明治三十七年ごろ母親に連れられて上京」（『古今東西落語家事典』1989、平凡社）。

(15) たとえば阿佐ヶ谷に縁のない話者が⑥に発音することがあるが（②が優勢な実態があるにもかかわらず、また土地の人の発音を聞き⑥を覚えたわけでもなく）、これは「見かけの伝統アクセント」と見なす。なじみの深さが平板型につながったのではなく、平板型を好む性向によるものにすぎないからである。

(16) 浅草生まれの女優・沢村貞子（1908～1998）は、高橋義孝と5代目の柳家小さんとの座談会「ほどのいいはなし 東京言葉今昔」（『東京人』3-5、1988）で、「浜町」はよその人は②に発音するが「ほんとに住んでるひと」は①だと言う。浅草と浜町では、さほど距離は離れていないにもかかわらず、土地っ子以外の人からは①が出にくかったようである（ふだん①に発音していたのであれば、上記の指摘をする必要がない）。

(17) 「目白」に関し、⑥では鳥のメジロになるから地名は①と言う話者は「根津」について⑥は選べない。もし「根津⑥」では「寝ずの番④」のようだと根津の人が訴えた場合、それは「目白」の場合と同じ理屈であり、「根津①」を受け入れざるを得なくなるからである。同音語との区別という理由は、むやみに持ち出さないほうが無難である。

(18) 吉野氏は1935年3月の生まれ。10代続けて藤原地区に居を構える。

(19) 実質的に東京アクセントと標準アクセントとの差が小さなものであっても、認識レベルでは両者を区別したほうがよい。たとえば教師を目指す人が身につけたいのは、標準語の一部としての標準アクセントであり、方言としての東京アクセントではない。

(20) たとえば「前橋は東京では①か②だが地元では⑥」とのみ説明した場合、地元アクセントが標準だという意見が出るのは当然である。しかし「教育のことなどを考えると、標準アクセントとしては、東京アクセントをもとにした①に統一するほうが望ましいから、そういう目的のために①を認めてもらいたい、ただし、それは決して東京のほうが偉いと言っているわけではない」と前橋の人に誠意をもって説明すれば、必ずや理解が得られると信じたいが、寡聞にして、そのような努力がなされた話を知らない。その努力をしないのなら、本稿で扱った固有名に対し、新たに東京に移り住んだ人や近県の人々が「東京の人は我々の地元を勝手なアクセントで発音するのだから、こちらも勝手に呼ばせてもらう」という態度を示したとしても、それを非難する資格を持たない。

(21) 「〈座談会〉標準アクセント選定の問題点」(『文研月報』12-1、1962)で秋永一枝氏が「両親が地方の場合、非常にその影響を受けていることが」と発言したのに対し、金田一春彦氏は「東京で育てば、大体平均化することが多い」のではないかと答え、別の箇所で「両親がほかの地方の人であっても、こどもが両親のことば、アクセントをまねしていますと、友だちに笑われたりする」とも言う。しかし山の手の子が親(たとえば薩長出身)と同じ発音をした場合、周りにも似た環境の子どもが多いので、ほかの子に笑われ自分のアクセントがおかしいと気づく、という機会がどれほどあったか疑問である。また親に教わった語のうち、友だちとの会話に使わないものについては、そのアクセントを長く保つはずである。いい悪いは別にして、親の影響がもたになり、東京という場所で使われるアクセントに動揺が広がる可能性を過小評価すべきではない。念のため言い添えるが、東京人が非東京人にそのアクセントは違うと指摘すると「そんなに東京が偉いのか」とまるで人格を否定されたかのように受け取る人もいるが、たとえば西郷隆盛や高杉晋作が薩摩弁・長州弁でしゃべろうと彼らが人間として立派であることとアクセントが無関係であるように、本来、アクセントと人格とは別物である。そのことを理解し、東京人も言い方には心を配る必要がある。

(22) 東京出身の研究者(親は非東京アクセント地域)が㊦自らのアクセントをアクセント辞典(言語形成期のころ、世間で使われていたもの)のそれと照合する、㊧辞書のアクセントとずれる語があった場合に、そのアクセントが最近のアクセント辞典に掲載されるかどうかを確認する、㊨そのアクセントが親の出身地域のアクセントと一致するかどうかを調べる、といった作業をすれば、何かしら語ごとのアクセント変化の要因が探れると推測する。

(23) 作家の小島政二郎(1894~1994)は『花ざかり』(1970、ロングランプレス)で(疎開先から下谷に戻りたくとも転入の手続きが大変に面倒で)「ぐずぐずしている間に、その土地へ暴力団に家を建てられて強奪されてしまった」と述べている。

(24) 秋永(2002, p.55)に「近年の平板化現象は大方の中高年に異和感・不快感を起こさせるもので、在来のものとはその点一線を」画すとあり(語例は「データ」「レベル」など)、杉本(2014, p.366)に「敗戦はことばの森、東京語の時間的空間的原野すら焼きはらった。標準的東京アクセントも崩れ、平板な「テレビアクセント」が生じている」とあるのは、旧東京人には、その語になじみが強くなった段階でようやく平板化する節度があったのに対し、戦後ないし近年の平板化に、㊩知らない語、自信のない語は平板に発音する、㊪起伏式を選択肢として考慮することなく外来語を平板に発音するといった傾向があることを敏感に察知した結果ではないか。平板式に対する意識に質的な違いがあるということであり、もともと名詞には平板式が多いとの単純な話では片づけられない。話者の世代ごとの意識差も検討に値するだろう。

(25) 『日国』に載っていない固有名、たとえば上述の「湯檜曾」は、おそらく現代人は㊫か㊬で迷うだろうから(知らないからとりあえず㊫や㊬というのではまずい)、その場合

は地元で使われる①も参考に、標準アクセントも①にすることを検討してはどうだろうか（旧東京人が⑩を使いつけていたことを示すデータがある場合は、この限りではない）。

(26) 三宅氏は「言語の進歩はむしろ表現力の増大に求められる」とし、「統語論の精緻化と合理化」や「あいまい性の散文よりの除去」などを進歩の条件にあげる。

(27) 祖父母や両親から秋永一枝氏や川上葵氏などと同様のアクセントを受け継ぐ人、あるいは一部ずれるところがあるものの、そのアクセントがほかの地域の影響でなく、純粹に東京人の世代的な好みの差から来るものだと言・解説できる研究者がいれば頼もしい。東京人には「最近Xのアクセントが変わった」との指摘に加え、自らが子どものころ親などに「お前のXのアクセントは変だ」としかられた経験なども公表してもらいたい（アクセントの世代差を知る手がかりになる）。東京以外の関東出身の研究者の場合、東京と異なる地元のアクセントについてデータが提供できるのではないかと。たとえば群馬の人は「みずばしょう」を⑩に発音する傾向があるが、これは標準アクセントの③とは異なる地域的なアクセントとして記録できる（前述の吉野氏も⑩であり、「夏の思い出」（1949）の曲の影響はないと考えるが、1949年以前の音声資料を確認したうえでないと断定はしにくい。もっとも、曲の影響の有無はともかく、⑩の話者が多いことは確か）。このような語ごとの地域差は、程度の差こそあれ神奈川、埼玉、千葉などにもあるだろう。（たとえば東京の人は「久里浜⑩」、「煮ほうとう②」（食べ物）と発音するのに対し、三浦半島の人は「久里浜②」と言い、深谷市の人は「煮ほうとう⑩」と言う、というような例があげられる）そして話者自身がそれが地域的なアクセントだと気づかずに使っていれば、首都圏で使われるアクセントの動揺にもつながる。

(28) 標準や規範という条件を設けず、実態記述に徹するアクセント辞典が一つあると便利。

(29) いずれ老人はいなくなるから、若い世代のことばづかいでかまわないと考える向きがある。実態として若い世代の言い方が優勢になることはありうることだが、このような、世代をこえたコミュニケーションを最初から放棄するような考え方には倫理的に問題があるというのが筆者の立場である。

(30) 名詞に平板化が目立つ一方で、もとは平板の「解決」「おみくじ」「ゆりかご」「ぞうきん」が「解決①」「おみくじ②」「ゆりかご②」「ぞうきん③」と起伏化する現象もある。

(31) 筆者自身について記す。両親が東京から群馬の富岡市に転居し、筆者はそこで1977年に生まれた。同地に鼻濁音がなく、筆者がガ行を[g]に発音することに気づいた父（1937年生まれ）に鼻濁音をしこまれた。アクセントも同様。ただし当の東京人に[g]が多くなったこともあり、常に鼻濁音で話すのではなく相手に合わせるようにしている。

（なかがわ・しゅうた／本学兼任講師）